

注文の多い料理店

二人 [ふたり] の若 [わか] い紳士 [しんし] が、すつかりイギリスの兵隊 [へいたい] のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲 [てつぱう] をかついで、白熊 [しろくま] のやうな犬 [いぬ] を二疋 [ひき] つれて、だいぶ山奥 [やまおく] の、木 [き] の葉 [は] のかさかさしたところを、こんなことを云 [い] ひながら、あるいてをりました。

「ぜんたい、こゝらの山 [やま] は怪 [け] しからんね。鳥 [とり] も獣 [けもの] も一疋 [ひき] も居 [ゐ] やがらん。なんでも構 [かま] はないから、早 [はや] くタンタアーンと、やつて見 [み] たいもんだなあ。」

「鹿 [しか] の黄 [き] いろな横 [よこ] つ腹 [ばら] なんぞに、二三発 [ぱつ] お見舞 [みまひ] もうしたら、ずゐぶん痛快 [つうくわい] だらうねえ。くるくるまはつて、それからどたつと倒 [たふ] れるだらうねえ。」

それはだいぶの山奥 [やまおく] でした。案内 [あんない] してきた専門 [せんもん] の鉄砲 [てつぱう] 打 [う] ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行 [い] ってしまつた

くらゐの山奥 [やまおく] でした。

それに、あんまり山 [やま] が物凄 [ものすご] いので、その白熊 [しろくま] のやうな犬 [いぬ] が、二疋 [ひき] いつしよにめまひを起 [おこ] して、しばらく吠 [うな] っつて、それから泡 [あわ] を吐 [は] いて死 [し] んでしまひました。

「じつにぼくは、二千 [せん] 四百円 [びやくゑん] の損害 [そんがい] だ」と一人 [ひとり] の紳士 [しんし] が、その犬 [いぬ] の眼 [ま] ぶたを、ちよつとかへしてみても [い] ひました。

「ぼくは二千 [せん] 八百 [びやく] 円 [ゑん] の損害 [そんがい] だ。」と、もひとりが、くやしさに、あたまをまげて言 [い] ひました。

はじめの紳士 [しんし] は、すこし顔 [かほ] いろを悪 [わる] くして、ぢつと、もひとりの紳士 [しんし] の、顔 [かほ] つきを見 [み] ながら云 [い] ひました。

「ぼくはもう戻 [もど] らうとおもふ。」

「さあ、ぼくもちやうど寒 [さむ] くはなつたし腹 [はら] は空 [す] いてきたし戻 [もど] らうとおもふ。」

「そいぢや、これで切 [き] りあげやう。なあに戻 [もど] りに、昨日 [きのふ] の宿屋

「やどや」で、山鳥〔やまどり〕を拾円〔じふゑん〕も買〔か〕つて帰〔かへ〕ればいゝ。」

「兎〔うさぎ〕もでてゐたねえ。さうすれば結局〔けつきよく〕おんなじこつた。では帰〔かへ〕らうぢやないか」

ところがどうも困〔こま〕つたことは、どつちへ行〔い〕けば戻〔もど〕れるのか、いつかう見当〔けんたう〕がつかなくなつてゐました。

風〔かぜ〕がどうと吹〔ふ〕いてきて、草〔くさ〕はざわざわ、木〔き〕の葉〔は〕はかさかさ、木〔き〕はごんごんと鳴〔な〕りました。

「どうも腹〔はら〕が空〔す〕いた。さつきから横〔よこ〕つ腹〔ぱら〕が痛〔いた〕くてたまらないんだ。」

「ぼくもさうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。あゝ困〔こま〕つたなあ、何〔なに〕かたべたいなあ。」

「喰〔た〕べたいもんだなあ」

二人〔ふたり〕の紳士〔しんと〕は、ざわざわ鳴〔な〕るすゝきの中〔なか〕で、こんなことを云〔い〕ひました。

その時〔とき〕ふとうしろを見〔み〕ますと、立派〔りつぱ〕な一軒〔けん〕の西洋造

[せいやうづく] りの家 [うち] がありました。

そして玄関 [げんくわん] には



といふ札 [ふだ] がでてゐました。

「君 [きみ]、ちやうどいゝ。こゝはこれでなかなか開 [ひら] けてるんだ。入 [はい] らうぢやないか

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何 [なに] か食事 [しよくじ] ができるんだらう」

「もちろんできるさ。看板 [かんばん] にさう書 [か] いてあるぢやないか」

「はいらうちやないか。ぼくはもう何 [なに] か喰 [た] べたくて倒 [たぶ] れさうなんだ。」

二人 [ふたり] は玄関 [げんくわん] に立 [た] ちました。玄関 [げんくわん] は白 [しろ] い瀬戸 [せと] の煉瓦 [れんぐわ] で組 [く] んで、実 [じつ] に立派 [りつぱ] なもんです。

そして硝子 [がらす] の開 [ひら] き戸 [ど] がたつて、そこに金文字 [きんもじ] でかう書 [か] いてありました。

「どなたもどうかお入 [はい] りください。決 [けつ] してご遠慮 [ゑんりよ] はありません」

二人 [ふたり] はそこで、ひどくよろこんで言ひました。

「こいつはどうだ、やつぱり世 [よ] の中 [なか] はうまくできてるね、え、けふ一日 [いちにち] なんぎしたけれど、こんどはこんないゝこともある。このうちは料理店 [れうりてん] だけれどもたゞでご馳走 [ちさう] するんだぜ。」

「どうもさうらしい。決 [けつ] してご遠慮 [ゑんりよ] はありませんといふのはその意味 [いみ] だ。」

二人〔ふたり〕は戸〔と〕を押〔お〕して、なかへ入〔はい〕りました。そこはすぐ廊下〔らうか〕になつてゐました。その硝子戸〔がらすど〕の裏側〔うらがは〕には、金文字〔きんもじ〕でかうなつてゐました。

「ことに肥〔ふと〕つたお方〔かた〕や若〔わか〕いお方〔かた〕は、大歓迎〔だいくわんげい〕いたします」

二人〔ふたり〕は大歓迎〔だいくわんげい〕といふので、もう大〔おほ〕よろこびです。

「君〔きみ〕、ぼくらは大歓迎〔だいくわんげい〕にあたつてゐるのだ。」

「ぼくらは両方兼〔りやうはうか〕ねてるから」

ずんずん廊下〔らうか〕を進〔すゝ〕んで行〔い〕きますと、こんどは水〔みづ〕いろのペンキ塗〔ぬ〕りの扉〔と〕がありました。

「どうも変〔へん〕な家〔うち〕だ。どうしてこんなにたくさん戸〔と〕があるのだらう。」

「これはロシア式〔しき〕だ。寒〔さむ〕いところや山〔やま〕の中〔なか〕はみんなかうさ。」

そして二人〔ふたり〕はその扉〔と〕をあけやうとしますと、上〔うへ〕に黄〔き〕いろな字〔じ〕でかう書〔か〕いてありました。

「当軒 [たうけん] は注文 [ちうもん] の多 [おほ] い料理店 [れうりてん] です
からどうかそこはご承知 [しやうち] ください」

「なかなかはやつてるんだ。こんな山 [やま] の中 [なか] で。」

「それあさうだ。見 [み] たまへ、東京 [とうきやう] の大 [おほ] きな料理屋 [れうり
や] だつて大通 [おほどほ] りにはすくないだらう」

二人 [ふたり] は云 [い] ひながら、その扉 [と] をあけました。するとその裏側 [う
らがは] に、

「注文 [ちうもん] はずゑぶん多 [おほ] いでせうがどうか一々こらえて下 [くだ
さい。』

「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士 [しんし] は顔 [かほ] をしかめました。

「うん、これはきつと注文 [ちうもん] があまり多 [おほ] くて支度 [したく] が手間取
[てまど] るけれどもごめん下 [くだ] さいと斯 [か] ういふことだ。」

「さうだらう。早 [はや] くどこか室 [へや] の中 [なか] にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座 [すわ] りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉 [と] が一 [ひと] つありました。そしてその

わきに鏡 [かゞみ] がかゝつて、その下 [した] には長 [なが] い柄 [え] のついたブラシが置 [お] いてあつたのです。

扉 [と] には赤 [あか] い字 [じ] で、

「お客 [きやく] さまがた、こゝで髪 [かみ] をきちんとして、それからはきものゝ泥 [どろ] を落 [おと] してください。」と書 [か] いてありました。

「これはどうも尤 [もつと] もだ。僕 [ぼく] もさつき玄関 [げんくわん] で、山 [やま] のなかだとおもつて見 [み] くびつたんだよ」

「作法 [さはふ] の厳 [きび] しい家 [うち] だ。きつとよほど偉 [えら] い人 [びと] たちが、たびたび来 [く] るんだ。」

そこで二人 [ふたり] は、きれいに髪 [かみ] をけづつて、靴 [くつ] の泥 [どろ] を落 [おと] しました。

そしたら、どうです。ブラシを板 [いた] の上 [うへ] に置 [お] くや否 [いな] や、そつがぼうつとかすんで無 [な] くなつて、風 [かぜ] がどうつと室 [べや] の中 [なか] に入 [はい] つてきました。

二人 [ふたり] はびつくりして、互 [たがひ] によりそつて、扉 [と] をがたと開 [あ]

けて、次 [つぎ] の室 [へや] へ入 [はい] 行って [い] きました。早 [はや] く何 [なに] か暖 [あたゝか] いものでもたべて、元気 [げんき] をつけて置 [お] かないと、もう途方 [とほう] もないことになつてしまふと、二人 [ふたり] とも思 [おも] つたのでした。

扉 [と] の内側 [うちがは] に、また変 [へん] なことが書 [か] いてありました。

「鉄砲 [てつぽう] と弾丸 [たま] をこゝへ置 [お] いてください。」

見 [み] るとすぐ横 [よこ] に黒 [くろ] い台 [だい] がありました。

「なるほど、鉄砲 [てつぽう] を持 [も] つてものを食 [く] ふといふ法 [はふ] はない。」

「いや、よほど偉 [ゑら] いひとが始終来 [しじうき] てゐるんだ。」

二人 [ふたり] は鉄砲 [てつぽう] をはづし、帯皮 [おびかは] を解 [と] いて、それを台 [だい] の上 [うへ] に置 [お] きました。

また黒 [くろ] い扉 [と] がありました。

「どうか帽子 [ぼうし] と外套 [ぐわいたふ] と靴 [くつ] をおとり下 [くだ] さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方 [しかた] ない、とらう。たしかによつほどえらいひとなんだ。奥 [おく] に来 [き] てるのは」

二人 [ふたり] は帽子 [ぼうし] とオーバコート を釘 [くぎ] にかけて、靴 [くつ] をぬいでぺたぺたあるいて扉 [と] の中 [なか] にはいりました。

扉 [と] の裏側 [うらがは] には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡 [めがね]、財布 [さいふ]、その他 [た] 金物類 [かなものるゑ]、ことに尖 [とが] つたものは、みんなこゝに置 [お] いてください」

と書 [か] いてありました。扉 [と] のすぐ横 [よこ] には黒塗 [くろぬ] りの立派 [りつぱ] な金庫 [きんこ] も、ちゃんと口 [くち] を開 [くちあ] けて置 [お] いてありました。鍵 [かぎ] まで添 [そ] へてあつたのです。

「はゝあ、何 [なに] かの料理 [れうり] に電気 [でんき] をつかふと見 [み] えるね。金気 [かなけ] のものはあぶない。ことに尖 [とが] つたものはあぶないと斯 [か] う云 [い] ふんだらう。」

「さうだらう。して見 [み] ると勘定 [かんぢやう] は帰 [かへ] りにこゝで払 [はら]

ふのだらうか。」

「どうもさうらしい。」

「さうだ。きつと。」

二人〔ふたり〕はめがねをはづしたり。カフスボタンをとつたり、みんな金庫〔きんこ〕の中〔なか〕に入〔い〕れて、ぱちんと錠〔ぢやう〕をかけました。

すこし行〔い〕きますとまた扉〔と〕があつて、その前〔まへ〕に硝子〔がらす〕の壺〔つぼ〕が一〔ひと〕つありました。扉〔と〕には斯〔か〕う書〔か〕いてありました。

「壺〔つぼ〕のなかのクリームを顔〔かは〕や手足〔てあし〕にすつかり塗〔ぬ〕つてください。」

みるとたしかに壺〔つぼ〕のなかのものは牛乳〔ぎにう〕のクリームでした。

「クリームをぬれといふのはどういふんだ。」

「これはね、外〔そと〕がひじやうに寒〔さむ〕いだらう。室〔へや〕のなかがあんまり暖〔あたゝか〕いとひびがきれるから、その予防〔よぼう〕なんだ。どうも奥〔おく〕には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなとこで、案外〔あんぐわい〕ぼくらは、貴族〔きぞく〕とちかづきになるかも知〔し〕れないよ。」

二人〔ふたり〕は壺〔つぼ〕のクリームを、顔〔かほ〕に塗〔ぬ〕つて手〔て〕に塗〔ぬ〕つてそれから靴下〔くつした〕をぬいで足〔あし〕に塗〔ぬ〕りました、それでもまだ残〔のこ〕つてゐましたから、それは二人〔ふたり〕ともめいめいこつそり顔〔かほ〕へ塗〔ぬ〕るふりをしながら喰〔た〕べました。

それから大急〔おほいそ〕ぎで扉〔と〕をあけますと、その裏側〔うらがは〕には、

「クリームをよく塗〔ぬ〕りましたか、耳〔みゝ〕にもよく塗〔ぬ〕りましたか、」
と書〔か〕いてあつて、ちいさなクリームの壺〔つぼ〕がこゝにも置〔お〕いてありま
した。

「さうさう、ぼくは耳〔みゝ〕には塗〔ぬ〕らなかつた。あぶなく耳〔みゝ〕にひゞを切〔き〕らすとこだつた。こゝの主人〔しゅじん〕はじつに用意周到〔よういしうたう〕だね。」

「あゝ、細〔こま〕かいとこまでよく気〔き〕がつくよ。ところでぼくは早〔はや〕く何〔なに〕か喰〔た〕べたいんだが、どうも斯〔か〕うどこまでも廊下〔らうか〕ぢや仕方〔しかた〕ないね。」

するとすぐその前〔まへ〕に次〔つぎ〕の戸〔と〕がありました。

「料理 [れうり] はもうすぐできます。

十五分 [じふごふん] とお待 [ま] たせはいたしません。

すぐたべられます。

早 [はや] くあなたの頭 [あたま] に瓶 [びん] の中 [なか] の香水 [かうすゐ] をよく振 [ふ] りかけてください。」

そして戸 [と] の前 [まへ] には金 [きん] ピカの香水 [かうすゐ] の瓶 [びん] が置 [お] いてありました。

二人 [ふたり] はその香水 [かうすゐ] を、頭 [あたま] へばちやばちや振 [ふ] りかけました。

ところがその香水 [かうすゐ] は、どうも酔 [す] のやうな匂 [にほひ] がするのです。

「この香水 [かうすゐ] はへんに酔 [す] くさい。どうしたんだらう。」

「まちがへたんだ。下女 [げぢよ] が風邪 [かぜ] でも引 [ひ] いてまちがへて入 [い] れたんだ。」

二人 [ふたり] は扉 [と] をあけて中 [なか] にはいりました。

扉 [と] の裏側 [うらがは] には、大 [おほ] きな字 [じ] で斯 [か] う書 [か] いてあ

りました。

「いろいろ注文 [ちうもん] が多 [おほ] くてうるさかつたでせう。お気 [き] の毒 [どく] でした。もうこれだけです。どうかからだに中 [ぢゆう] に、壺 [つぼ] の中 [なか] の塩 [しほ] をたくさんよくもみ込 [こ] んでください。」

なるほど立派 [りつぱ] な青 [あを] い瀬戸 [せと] の塩壺 [しほつぼ] は置 [お] いてありましたが、こんどといふこんどは二人 [ふたり] ともぎよつとしてお互 [たかひ] にクリームをたくさん塗 [ぬ] った顔 [かほ] を見合 [みあは] せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもふ。」

「沢山 [たくさん] の注文 [ちゆうもん] といふのは、向 [むか] ふがこつちへ注文 [ちゆうもん] してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店 [せいやうれうりてん] といふのは、ぼくの考 [かんが] へるところでは、西洋料理 [せいやうれうり] を、来 [き] た人 [ひと] にたべきせるのではなくて、来 [き] た人 [ひと] を西洋料理 [せいやうれうり] にして、食 [た] べてやる家 [うち] とかういふことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが

……。」がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言 [い] へませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言 [い] へませんでした。

「遁げ……。」がたがたしながら一人 [ひとり] の紳士 [しんし] はうしろの戸 [と] を押 [お] さうとしましたが、どうです、戸 [と] はもう一分 [いちぶ] も動 [うご] きませんでした

奥 [おく] の方 [ほう] にはまだ一枚扉 [いちまいと] があつて、大 [おほ] きなかぎ穴 [あな] が二つつき、銀 [ぎん] いろのホークとナイフの形 [かたち] が切 [き] りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労 [くらう] です。

大 [たい] へん結構 [けつこう] にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書 [か] いてありました。おまけにかぎ穴 [あな] からはきよろきよろ二 [ふた] つの青 [あを] い眼玉 [めだま] がこつちをのぞいてゐます。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣 [な] き出 [だ] しました。

すると戸 [と] の中 [なか] では、こそこそこんなことを云 [い] つてゐます。

「だめだよ。もう気 [き] がついたよ。塩 [しほ] をもみこまないやうだよ。」

「あたりまへさ。親分 [おやぶん] の書 [か] きやうがまづいんだ。あすこへ、いろいろ注文 [ちゆうもん] が多 [おほ] くてうるさかつたでせう、お気 [き] の毒 [どく] でしたなんて、間拔 [まぬ] けたことを書 [か] いたもんだ。」

「どつちでもいゝよ。どうせばくらは、骨 [ほね] も分 [わ] けて呉 [く] れやしないんだ。」

「それはさうだ。けれどももしこゝへあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任 [せきにん] だぜ。」

「呼 [よ] ぼうか、呼 [よ] ぼう。おい、お客 [きやく] さん方 [がた]、早 [はや] くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿 [さら] も洗 [あら] つてありますし、菜 [な] つ葉 [ぱ] ももうよく塩 [しほ] でもんで置 [お] きました。あとはあなたがたと、菜 [な] つ葉 [ぱ] をうまくとりあはせて、まつ白 [しろ] なお皿 [さら] にのせる

丈 [だ] けです。はやくいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌 [きら] ひですか。そんならこれから火 [ひ] を起 [おこ] してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。」

二人 [ふたり] はあんまり心 [こゝろ] を痛 [いた] めたために、顔 [かほ] がまるでくしやくしやの紙屑 [かみくづ] のやうになり、お互 [たがひ] にその顔 [かほ] を見合 [みあは] せ、ぶるぶるふるえ、声 [こゑ] もなく泣 [な] きました。

中 [なか] ではふつつつとわらつてまた叫 [きけ] んでゐます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣 [な] いては折角 [せつかく] のクリームが流 [なが] れるぢやありませんか。へい、たゞいま。ぢきもつてまゐります。さあ、早 [はや] くいらつしやい。」

「早 [はや] くいらつしやい。親方 [おやかた] がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌 [した] なめずりして、お客 [きやく] さま方 [がた] を待 [ま] つてゐられます。」

二人 [ふたり] は泣 [な] いて泣 [な] いて泣 [な] いて泣 [な] いて泣 [な] きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」といふ声 [こゑ] がして、あの白熊 [しろくま] のやうな犬 [いぬ] が二匹 [ひき]、扉 [と] をつきやぶつて室 [へや] の中 [なか] に飛 [と] び込 [こ] んできました。鍵穴 [かぎあな] の眼玉 [めだま] はたちまちなくなり、犬 [いぬ] どもはうとうとなつてしばらく室 [へや] の中 [なか] をくるくる廻 [まは] つてゐましたが、また一声 [こゑ] 「わん。」と高 [たか] く吠 [ほ] えて、いきなり次 [つぎ] の扉 [と] に飛 [と] びつきました。戸 [と] はがたりとひらき、犬 [いぬ] どもは吸 [す] ひ込 [こ] まれるやうに飛 [と] んで行きました。

その扉 [と] の向 [むか] ふのまつくらやみのなかで、

「にやあお、くわあ、ごろごろ。」といふ声 [こゑ] がして、それからがさがさ鳴 [な] りました。

室 [へや] はけむりのやうに消 [き] え、二人 [ふたり] は寒 [さむ] さにぶるぶるふるえて、草 [くさ] の中 [なか] に立 [た] つてゐました。

見 [み] ると、上着 [うはぎ] や靴 [くつ] や財布 [さいふ] やネクタイピンは、あつちの枝 [えだ] にぶらさがつたり、こつちの根 [ね] もとにちらばつたりしてゐます。風

「かぜ」がどうと吹「ふ」いてきて、草「くさ」はざわざわ、木「き」の葉「は」はかさかさ、木「ぎ」はごんごんと鳴「な」りました。

犬「いぬ」がふうとうなつて戻「もど」つてきました。

そしてうしろからは、

「旦那「だんな」あ、旦那「だんな」あ、」と叫「さけ」ぶものがあります。

二人「ふたり」は俄「には」かに元気「げんき」がついて

「おゝい、おゝい、こゝだぞ、早「はや」く来「こ」い。」と叫「さけ」びました。

簑帽子「みのぼうし」をかぶつた専門「せんもん」の獵師「れうし」が、草「くさ」をざわざわ分「わ」けてやつてきました。

そこで二人「ふたり」はやつと安心「あんしん」しました。

そして獵子「れうし」のもつてきた団子「だんご」をたべ、途中「とちう」で十円「ゑん」だけ山鳥「やまどり」を買「か」つて東京「とうきやう」に帰「かへ」りました。

しかし、さつき一ぺん紙「かみ」くづのやうになつた二人「ふたう」の顔「かほ」だけは、東京「とうきやう」に帰「かへ」つても、お湯「ゆ」にはいつても、もうもとのとほりになほりませんでした。

■このファイルについて

標題：注文の多い料理店

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等と思われる箇所は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：2005年9月25日